

都市科学部ロゴマーク学生公募2021をめぐって

都市科学部ロゴマーク選考委員会 委員長

博沼範久 [都市社会共生学科教授]

今、都市とは何なのだろう。この地球という惑星に誕生したサピエンスの歴史のなかで、都市とは果たして何だったのだろう。都市の未来はどのようなふうになるのだろうか。どうなる必要があるのだろうか。

都市は自由の場所なのだろうか。欲望と富の、情報と物資の集積地なのだろうか。文化や文明の発酵地、発信地なのだろうか。孤独や罪悪の巣窟なのだろうか。攻撃や防衛の対象なのだろうか。環境の最大の破壊者なのだろうか。都市はサピエンスだけのものなのだろうか。

今、大学を拠点に都市を、そして都市からこの世界を、思考し、科学し、実践を行うことに、どのような意味や価値があるのだろうか。それはどのような効力を持ち得るのだろうか。そして四学科（都市社会共生学科、建築学科、都市基盤学科、環境リスク共生学科）で構成される都市科学部は、どのような理念や目標を抱き得るのだろうか。

都市科学部のロゴマークをデザインするということは、こうした問いを可能な限りたくさん内包、総合し、それを抽象する図像を描き出すというよりは、こうした問いが闇のなかに連なっては閃く、長くうねった道を歩いていくための「灯火」をつくることなのかもしれない。

2021年度、都市科学部では“都市の未来を多様な視点からデザインする”実践の場として、第2回となる都市科学部ロゴマークの学生公募を行った。17点の応募があった第1回に続いて9点の応募があり、学部公式ロゴマークとなる最優秀賞作品選定は今回も見送ったが、代議員会のメンバーで構成した都市科学部ロゴマーク選考委員会は、3点の入賞作品を選出することにした。

世に溢れるロゴ環境のなかで類似性を払拭するのは困難な仕事だが、選外の作品を含め、そしてとりわけ入賞作品は、いずれもよく考えられたデザインだったと思う。漢字のフォントデザインとも呼応しつつ、曲面の配置や色彩のグラデーションが美しいもの。魅力的なピクトグラム配列が、変奏や展開の可能性を秘めたもの。四学科の要素を図像化し、夜明けの天蓋-大地の色彩と形態に内包させたもの。各々の特性を活かすかたちで、それぞれ都市科学シンポジウム、卒業記念グッズ、学部HPロゴ表彰記事のサムネイルに使用することになった。

紙媒体でも電子媒体でも、大きく表示しても小さく表示しても、場合によっては多色でも単色でも、「それ」と認識できる都市科学部の公式ロゴを探し求める試みは、まだ終わらない。プロのデザイナーに金銭と引き換えに依頼するのが近道なのか、もう少し学生公募を続けてみるのが都市科学部らしいのか。学生サイド、事務サイド、教員サイドの三位一体で決めていくのが、あるいは出来るところからコラージュ(Collage)感覚で話し合っていくのが、きっと都市科学部(College of Urban Sciences)らしいのだろう。